F CLUB

エフクラブ

カメラ・写真のすばらしさをあなたに

2002年11月1日発行 隔月1日発行 No.56

F CLUB Photo Salon
「僕にしか撮れない黒部」
志水哲也 — 2

名写真家の言葉●今森光彦 — 22

撮影テクニック 平野塾入門●「散歩写真」を撮る — 8

話題の製品紹介●「ズーム全盛のいま、あえて単焦点レンズにこだわってみる」 — 10

なるほど納得!カメラの基本用語●「明るいレンズってなんのことだろう?」 — 12

写真は時代の証言者 — 12

丹野清志のこれどうです科 カメラの殿堂[1]●「ミノルタTC-1」 — 13

どこでも突撃隊●フィルムからプリントが完成するまでの工程をレポートせよ! — 14

Fクラブ通信 — 15

マジックフォトグラフ●「生きた緑だけが赤く写る!?〜赤外フィルム」 — 17

読者の作品展 選ぶ人・伊奈喜久雄 編集部・選 — 18

隔月刊
Number
56

F CLUB Photo Salon

「僕にしか撮れない黒部」

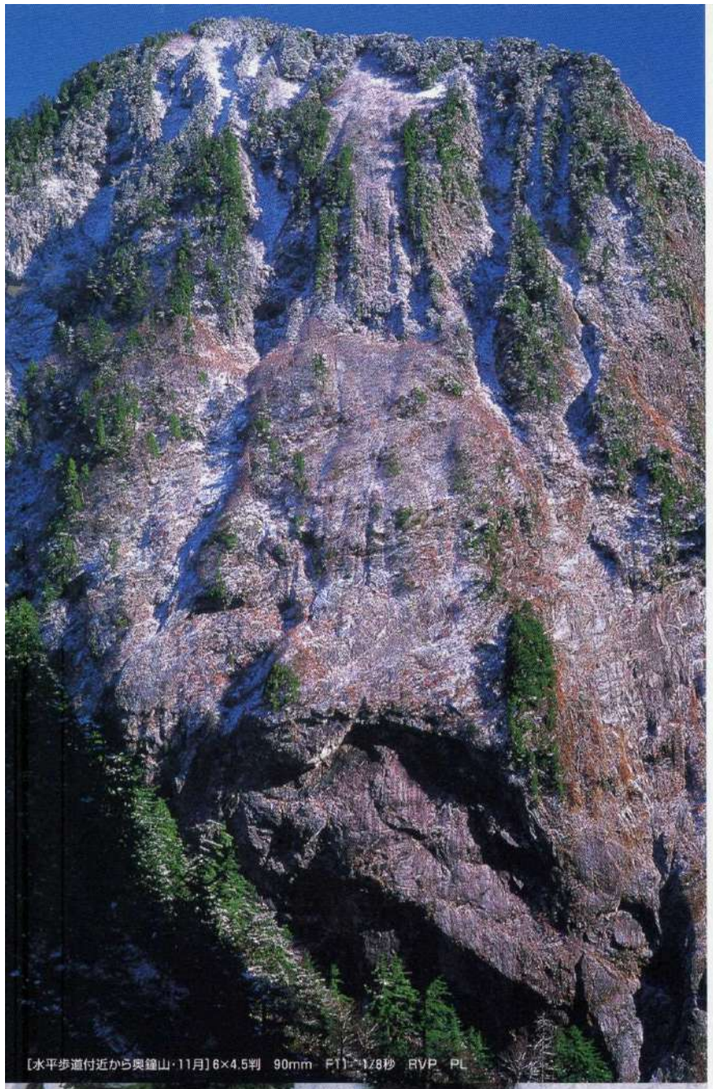
志水哲也

●名写真家の言葉

「命と命の関わり合いを撮りたい…」今森光彦

●丹野清志のこれどうです科 カメラの殿堂[1]「ミノルタTC-1」

「一日10台完成!
カメラ職人技ここにあり」



[水平歩道付近から奥鐘山・11月] 6×4.5判　90mm　F11　1/8秒　RVP　PL

[黒部源流 赤木沢出合・5月] 35mm判　24-50mm　F22　1秒　RVP　PL

僕にしか撮れない黒部

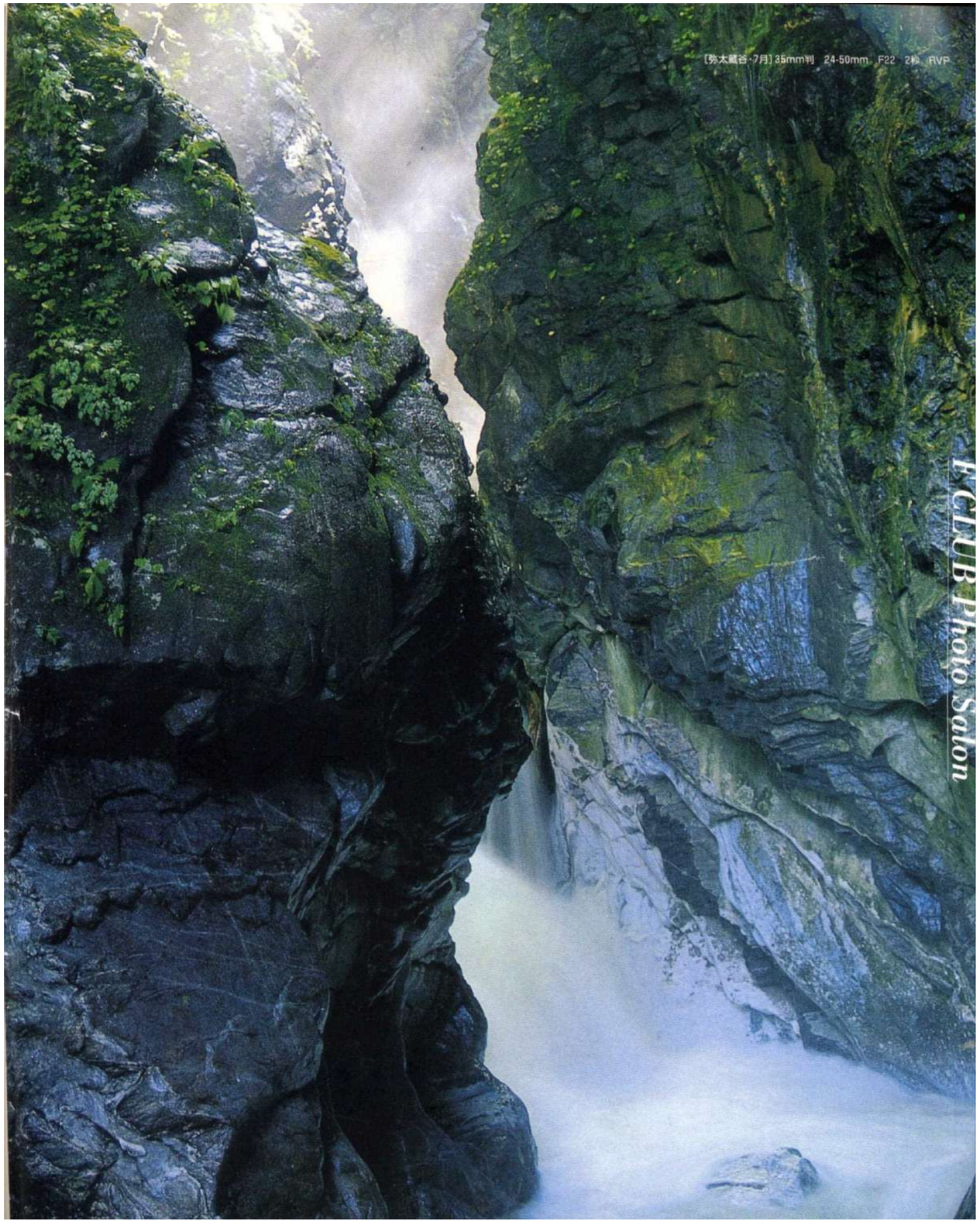
カメラを担いで岩を登り、沢を歩き、滝に挑む。
高校から山登りを始めた登山のプロは、
三十歳をすぎて黒部で写真家になった。
生きている意味をみつけたくて、
全身全霊をこめてシャッターを押したとき、
そこには誰も撮れないダイナミックで鮮烈な
黒部の四季が写っていた。

[ブナの若葉 牛首尾根にて・5月] 35mm判
90mmマクロ　F2.8　1/250秒　RVP

志水哲也

一九六五年生まれ。高校時代から山登りをはじめ、登山家として国内外での単独登攀、黒部全支流探査などで知られる。九六年登山ガイドとなり、志水哲也山案内事務所を開業。九七年に黒部の玄関口・宇奈月町に転居。九九年から写真へ傾倒し、以後現在まで登山ガイドと写真家の二足の草鞋で活動を続けている。「大いなる山　大いなる谷」（白山書房刊）、写真展「黒部」（東京ペンタックスフォーラムほか）など、著書・写真展多数。今回Fクラブフォトサロンで紹介した作品は、写真集『黒部　KUROBE』（山と渓谷社）に掲載されている。

志水哲也写真事務所　TEL.0765(65)2911
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/



[弥太郎谷・7月] 35mm判　24-50mm　F22　2秒　RVP

F CLUB Photo Salon

都会から黒部へ移り住んで登山家という名前は捨てた

黒部峡谷名物トロッコ電車の出発点でもある富山県宇奈月。志水哲也さんが、生まれ育った横浜から、家族ごとこの町に引っ越してきたのは5年前、31才の時の話である。「登山以外の方法でも、もっと黒部と深くかかわりたかったんです」。そのやりたい事のうちのひとつが写真だった。

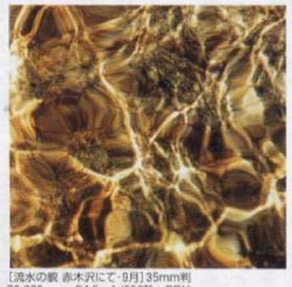
[流水の眼 黒部源流にて・8月]35mm判 90mmマクロ F4.5 1/250秒 EBX

「今は写真家と登山ガイドと二足の草鞋をはいてます。自分にとってはどっちも大事ですね」。

登山家ではなくガイド。登山の案内人、山のプロである。「登山家」という名前は3年前に捨てた。次から次へ難しい山、より高い山へとチャレンジしていく強烈なスピリットがなくなってしまった、というのがその理由らしい。その代わり、今は写真に黒部をおさめることに集中している。「そこに生きている意味をみつけたい」とまで言うのだから切実である。

そもそも「黒部の全支流をこの目で見たい！歩いてみたい！」と心に決めたのは二十歳の頃。すでに主だった支流はすべて歩きつくしてしまった。と、言葉で書くのは簡単だが、黒部峡谷の厳しさ、険しさは日本一とも言われるほど。特に剱沢大滝などは近づくのも難しい幻の滝だ。その滝を撮影した、志水さんの写真を見るといっぱいに水しぶきが躍っている。いったい、志水さんはどこに立ってカメラを構えているんだろう。まっさかさまに滝壺に落ち砕け散る水が巻き起こす、音と風の凄まじさ。それは台風の中にいるようだという。他にも岩の間を飛んで跳ねて、浴びろとばかりにほとばしる雪解け水。水のかたまりとなって、陽の光も空気もなにもかも連れて落ちていく瀑流。

「激流をザイル頼りに渡ったり、岩にぶら下がって撮ったり。滝ではしぶきを拭いながらの撮影です。テレビ取材をサポートするために、テレビカメラを担いで遡行したこともありますし、重荷は苦になりません」

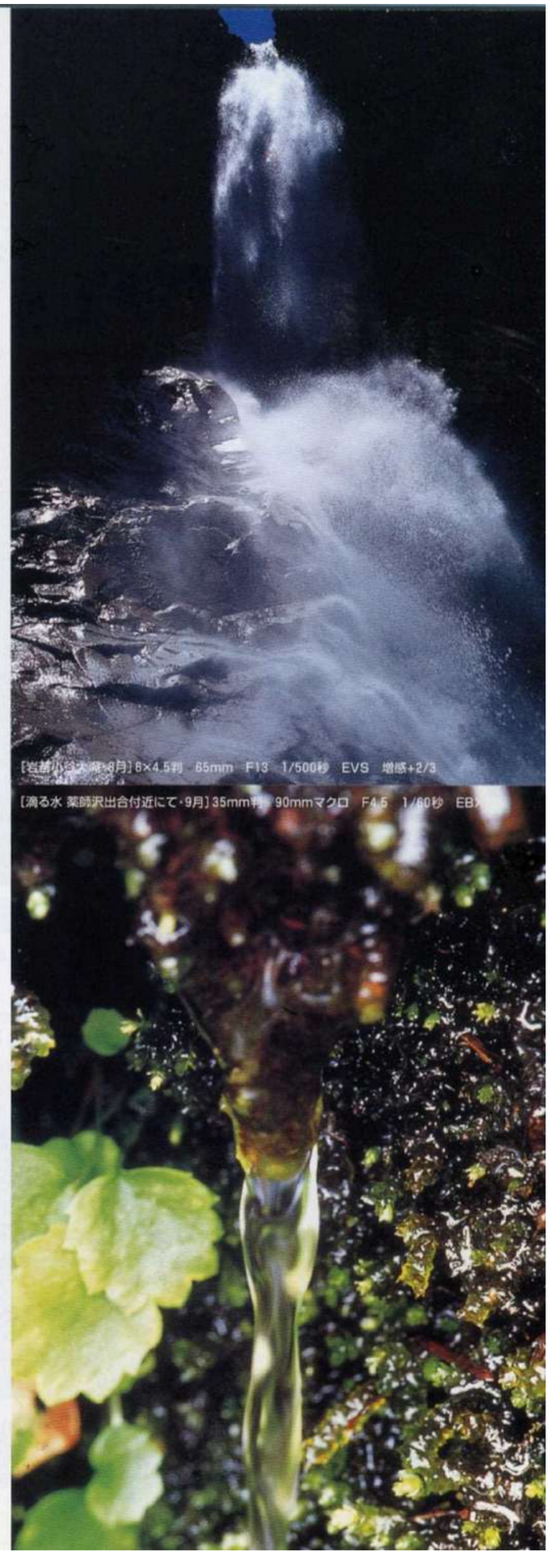


[流水の眼 赤木沢にて・9月]35mm判 70-300mm F4.5 1/250秒 EBX

滝を撮った朝、僕は僕にしか撮れない写真がある！と確信した

そうは言っても、山の装備に加え重たいカメラを担いで難路を行くなんて、素人には絶対ムリなこと。しかも闇もあれば寒さもある。その中でじっと独りチャンスを待って初めて撮れる写真も少なくない。

「最初の狙いどおりに滝頭から朝日が昇ってきた瞬間を撮影。これが写真集『黒部』



[岩越小谷大滝・8月]8×4.5判 85mm F13 1/500秒 EVS 増感+2/3

[滴る水 薬師沢出合付近にて・9月]35mm判 90mmマクロ F4.5 1/60秒 EBX

[剱沢大滝・9月]35mm判 38mm プログラムAE RDP

[雲ノ平から水晶岳・9月] 35mm判　70-300mm　F8　1/30秒　RVP

の表紙を飾った一枚にまつわるエピソードだ。

とにかく他にも苦労話には事欠かないのだが、その写真に不思議と悲壮感はない。ダイナミックで、むしろ開放的だ。見ている側にこんな所、本当にこの世にあるのかなぁと、ぼんやり考えさせてしまうようなぽっかりとした自由な時間をくれる。

生きているから一途にシャッターを押し続ける

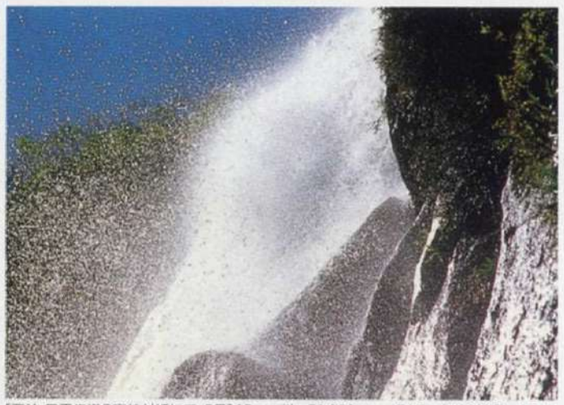
志水さんの作品には、月並みながらやっぱり黒部への愛情の深さと、自分の写真に対する誇りを感じる。おそらく今、志水さんほど黒部を歩いて、美しさも激しさも、四季をまるごと感じている人はいないだろう。黒部と生きているのだ。意に添わぬ写真を撮ったら、人生を預けて惚れた相手を裏切るような想いがするのではなかろうか。

だからこそ「カメラが濡れてもいいから、その時にしか撮れない自然が撮りたい。主張のある写真を撮りたいんです。たとえば、逆光でも構わないからコントラストのはっきりとした、ぎらっと光るような…」と、そこまでシャッターを押すことにこだわることができるのかもしれない。

なんだかうらやましい。

おそらく今日もまた、志水さんは黒部のどこかを歩いているのだろう。峡谷はもう冬の気配なのだろうか。写真を眺めながら、一生行くこともないかもしれない沢の音や気配を想像してみる。そういえば志水という苗字はミズをココロザスと書くんだなぁ…。

取材・文／妹尾みえ



[飛沫 日電歩道S字峡付近にて・5月] 35mm判　70-300mm　F4.5　1/1000秒　EBX

◎主な使用カメラ／フジGA645Zi、ニコンFM2、ニコンFM10